

漁業資源対策研究調査

岡崎孝博・守岡佐保

本調査では、小型機船底びき網漁業（以下、小底）の標本船日誌調査および主要漁協の漁獲統計調査の結果をデータベース化して解析することによって、漁獲対象とする資源動向の把握、資源状態の将来予測等を行うことを目的としている。

2009年度は、前年度に引き続き、徳島市漁協および椿泊漁協における小底の1操業あたりの主要魚種の漁獲量変動を調査した。

タチウオの漁獲量について、総じて減少傾向にあるが（図1）、資源そのものの減少に加えて、近年八モを夏季に集中的に獲りに行く場合があり、漁獲対象の変化による影響も考えられる。2009年では、八モを狙いに行っていた

小底の一部で、大量漁獲による魚価安のために、八モからタチウオ狙いへの漁獲対象の転換がみられた。なお、八モについては近年、資源状態は高水準にあると考えられる（本報告書「資源回復計画推進事業」を参照）。

イボダイの漁獲量について、徳島市漁協では近年漁獲が最も多かった2008年に比べて2009年は3割程度に減少したが、椿泊漁協では低調であった2008年に比べて2倍程度に増大した（図2）。

マアナゴの漁獲量について、2008年までは減少傾向であったが、2009年は椿泊漁協で前年の3倍程度に増大した。本種は、同様な生態的特徴をもつ八モとの競合が考えられ、八モと合わせて今後とも資源状態を注意深くモニタリングしていく必要がある（図3）。

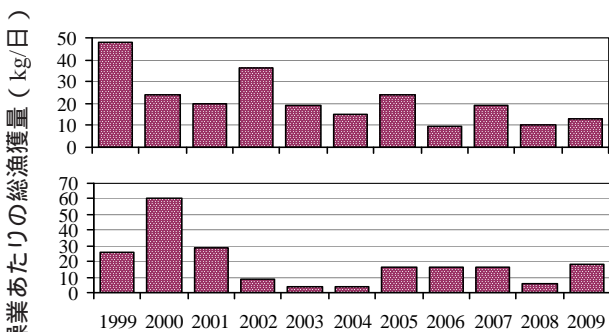


図1．小底によるタチウオの漁獲量の推移
上：徳島市漁協，下：椿泊漁協

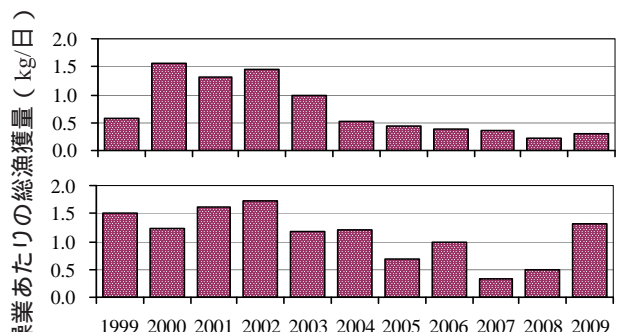


図2．小底によるマアナゴの漁獲量の推移
上：徳島市漁協，下：椿泊漁協

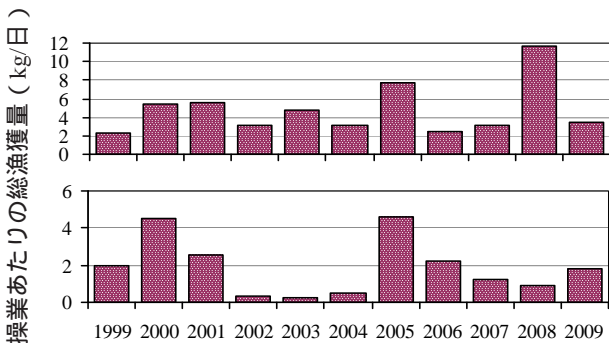


図3．小底によるイボダイの漁獲量の推移
上：徳島市漁協，下：椿泊漁協

主要甲殻類の漁獲量について、クマエビは2008年までは増加傾向であったが、2009年は両漁協ともに前年に比べて6割程度に減少した（図4）。ヨシエビは横ばい状態（図5）で、シャコは2004年以降、ジャノメガザミも2006年以降、低位横ばい状態である（図6、7）。なお、クルマエビおよびガザミについても近年、資源状態は低水準にあると考えられる（本報告書「資源回復計画推進事業」を参照）。

主要魚種の漁獲量変動から推定される資源水準について、高水準の魚種としてはハモおよびクマエビ、低水準としてはマアナゴ、クルマエビ、シャコおよびガザミ類が挙げられる。

今後は他の魚種も含めて漁獲動向のモニタリングを継続実施し、資源動向を把握するとともに、資源の増減の要因についても更に検討を深めていく。

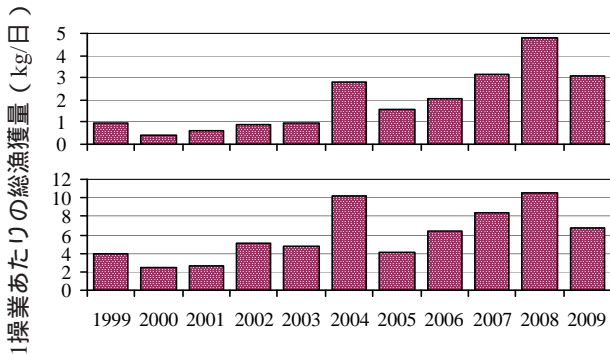


図4. 小底によるクマエビの漁獲量の推移
上：徳島市漁協，下：椿泊漁協

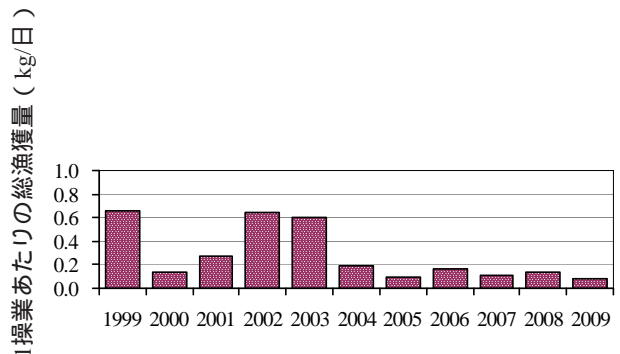


図6. 小底によるシャコの漁獲量の推移
(徳島市漁協)

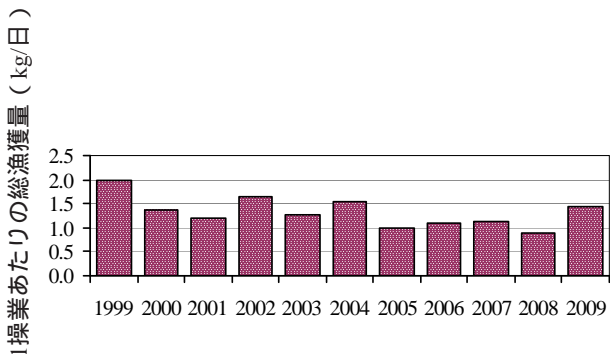


図5. 小底によるヨシエビの漁獲量の推移
(徳島市漁協)

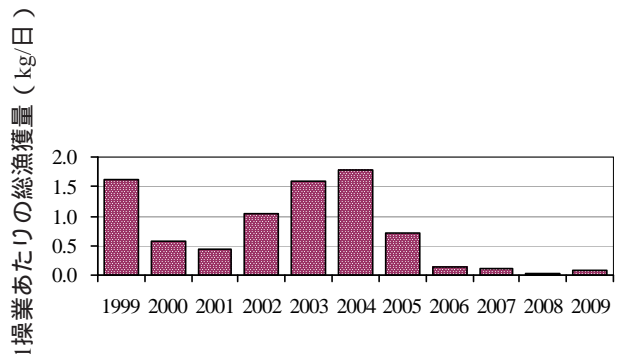


図7. 小底によるジャノメガザミの漁獲量の推移
(徳島市漁協)